

ワンダフル空手第32話 常設道場



今年の夏は世界中で猛暑が報じられている。
ここアラバマの夏の暑さも半端じゃない。
太陽がガンガン照り付ける中、サマーキャンプを先日無事終わらした。
まだまだ大丈夫である。
無理のできる歳ではないので、毎日の生活、テンポを崩さずに規則正しく送っている。
残暑の中がんばってワンダフル空手第32話、常設道場を書き上げる。

極真会館東京の総本部から第5回全日本選手権大会1973年{昭和48年}に呼ばれて、一年半ぶりに日本に帰ることになった。
まずアラバマからNYに出て、NYからアラスカ・アンカレジを経由して羽田に着いた。
成田空港はまだできていなかった。
NYから出発した機は一度アンカレジで停まり、そこで給油するのだがそのわずかな間乗客は一度ロビーに出られる。余談だが、なんと空港ロビーに立ち食いソバ屋があり、そのそばホント涙が出るほどうまかった。

久しぶりの日本は、なにからなにまで全ての面で素晴らしかった。
焼き魚、寿司、蕎麦、ちゃんこ鍋・・・何からなにまで絶品だった。
それに親しい友人との再会、悪ガキ時代の昔話、アメリカでの生活、特に英語での失敗談で故力男も関根も涙を流して爆笑、時間を忘れて会話は続いた。
夢中で過ごした毎日であったが、フツとした時、アラバマが思いだされた。
外の喧騒が消えた夜、シャワーをとり気も身体も静まり一人でベットに入る時、何気なくアラバマの生徒の事が浮かんできた。
僅かな期間だったがディープサウスのアラバマは想像していた以上に人々の情が厚かった。アメリ

カの良さは深南部とよく言われていたが、本当にそう思った。
それにロンとの友情は切っても切れない太い絆のように感じた。

全日本空手道選手権が無事成功のうちに終わった後、次の日まだ大会の熱気が漂う館長室で茂兄と3人で、いろいろと今後の事を話しあった。

「アラバマの田舎も良いが、もっと大きな都市に出るべきだと思うが・・・」と、そんな内容の話が二人からでたが、大きな都市に出る具体的なコネクションは、まだなかった。

館長と茂兄と話しながらも、チラッチラッと胸の中にロンやアラバマ・バーミンガハムの生徒の顔が浮かんで来て困った。結局もう少しアラバマ・バーミンガハムで様子を見ようとなった。

一年ちょっと過ごしたアラバマの生活のスタイルに頭も体も馴染んでしまったようだ。

意識して違いを見つけている訳ではないが、なんとなく自然とアラバマと東京を比較している自分がいて内心おどろいた。

・・・駅の雑踏を見ても、街の中の喧騒もアラバマとまったく東京は違うと思った。

アラバマはどこを向いても緑、ミドリの世界である。

NY も東京も何かコンクリートに囲まれているように感じてしまい、街を歩いている、ビルの上から見下されているような圧迫感を感じてしまう。

何となく気持ちが休まらない。

朝から晩まで休む暇もなく活動している東京の時間の流れに圧倒されてしまった。

アラバマに着いた当初、時間の流れが余りにもゆったりとして、調子がチョット狂ったが、その長閑な生活のスタイルが東京で懐かしく蘇ってきた。

本も書きたかったし、何か生活のテンポがゆっくりと流れるのが気に入った。

人の触れ合いは不思議なもんだとつくづく思った。

ロンやバーズなど知り合えたことは何か運命的な糸に導かれての事かも知れない。

全日本選手権が終わった後、いろいろなことが目まぐるしく胸の中で揺れた。

考え、悩んだと言うか、一番気になったのは約一年ちょっと指導していてアラバマ・バーミンガハムの生徒と結ばれた人間関係であった。

もし私が他の大都市に移ってしまったら私を信頼し、慕って来た生徒を裏切るような、失望させるような複雑な気持ちにさせられた。

もう少しアラバマで指導しようと決心する。

自分の手で黒帯をつくりたいし、自分の指導でチャンピオンをつくりたい、アラバマにも必ず極真カラテに情熱を持った才能のある若い人がいるはずだと思った。

人材は居る、だから情熱を持って指導すれば極真カラテは自然に広まる。

黒帯、チャンピオン・・・もっと極真カラテを南部に発展させたい、それには自分の道場、常設道場を持たなくてはいけないと思った。

アメリカに帰る機の中で、いろいろと考えをめぐらし、将来の事を想像する。

「そうだ常設道場を出そう」そこに考えが止まった瞬間、何か自然に力が湧いてきた。

バーミンガハムの空港にはロンをはじめバーズの家族、その他多くの生徒が私を迎えるため、わざわざ出向いてくれた。

ロンが私の顔を見て、なにか安心したような表情を見せたのが面白かった。

帰ってきた次の日から朝のランニング、稽古を始めた。

時差を取るには汗を流す事が一番である。

アラバマに帰ってきて時差もとれ心身ともに落ち着いてきたある日、ロンと今後の事について、話を始めた。

私の目標、希望をロンに打ち明ける。まず自分の常設道場を持ちたい。

私には資金などある訳がない。自慢ではないが最初にアメリカに着いたとき、ポケットには現金で50ドルしか持っていなかった。

その代り道着は贅沢に5着持ってきた。それが私の財産であった。

経済的に大変なことは分かるが、幸いにYMCAでの生徒は増え続けている。

そろそろビキナークラスとアドバンスの生徒を分けて指導する必要に迫られていた。

アドバンスの生徒も50人を超えていた。

そのアドバンスの生徒を新設道場に移し、YMCAの道場はビキナーを主として指導する。それに私の使命と言うか、将来の目的はカラテ道に生きると言うことである。

カラテを指導して人生を全うしたい。

YMCAで限られた時間内に指導するのでは極真カラテの発展に多くを望めない。

・・・いろいろと考えてきた事をロンに打ち明ける。ロンは実業家である。

前にも話したが二人の従兄弟と組んでアラバマ中に36軒の婦人靴の店を持っている。

経済的なことは誰よりも詳しく、そのセンスはバグゲンである。

ただ心配だったのは最初に此処に着いたときロンがいった言葉である。

「カラテを指導して家など持てない・・・」そんな内容であった。

“カラテ界はあくまでもビジネスとは別の世界であり、社会生活の中ではカラテ家はカラテを教育と言うか、一種の奉仕の精神で指導して生活するだけである”・・・そんな考えが彼のカラテに対しての認識であった。

ところが私の指導が彼の想像していたカラテの世界とまったく別な面を見せた。

まず生徒の数がロンの予想していたカラテの領域をはるかに凌駕し、さらに生徒達が私を慕ってくる心情、親しみ、尊敬、に心底驚いていたようである。

そ言う生徒と私の人間関係、古いい方をすれば師弟関係を現実に目の当たりにしてロンの考えも自然と変わってきたように見えた。

カラテの世界が他のプロスポーツのビジネスとなんら変わらないように思えてきたようである。

わずかな期間にロンのカラテの対する考えを私は自然に変えさせたかもしれない。

カラテの道場はそれほど込み入った施設は必要ない。

必要な最低限度は稽古ができる広さの部屋とトイレ、それに電話だけで結構である。

もちろんロッカールームや事務所、シャワー室もあれば素晴らしい。

実業家のロンは直ぐその事に気が付いていた。彼はすぐに生徒の数、レントの支払い、保険、電話、光熱費などを計算したようだ。

私の顔を見つめながら師範の道場を出せそうだ微笑した。

周りの風景が急に明るく輝いた。

私のカラテの対する情熱がロンの考えを変えたと感じて嬉しかった。

ロンといろいろな物件を見て回るエキサイティングな日が続いた。

私にロケーションや物件の内容は分かる訳がないが、ロンは場所も建物も自分の目で見て何かを感じないといけないと、言うので従った。

ロンが道場の候補になる物件を探す時の口癖はロケーション、ロケーションであった。

最初の道場は現在の道場の目と鼻の先にある商店街の二階であった。

ロンはそこに先ず暫らくいて、もっといい場所に移ろうと話してきた。

もちろん私にとっては反対することはない。

その物件は、一階に婦人洋服店と化粧品店がり道場の部屋はその上の二階であった。

「道場は1階にあった方が良いのは分かるが、とりあえずここでスタートして、もっといい物件が見つかったら移ろう」とロンがビジネス的なアドバイスをしてくれた。

「ロンがカラテの道場は設備があまり必要ないので簡単に移ることが出来る。ホントいいビジネスだ」と言って笑った顔が思い出される。

その最初の道場は、もちろん事務所、ロッカールームはなし、トイレはビルの中の共同、ただ稽古できる部屋であったがビジネス用の電話はいれた。

冷房、暖房はどうするのか迷ったが入れなかった。

自慢ではないが、あの頃カラテの道場でアラバマで冷暖房の設備がついていないのは私の道場だけだった。今の道場も冷房はロッカールームだけである。

それでもオープンするまで道場の内装やペンキ塗りなどけっこう時間がかかったが、全て生徒が協力してくれてぶじに、新道場が出発した。



茂兄もみんなアラバマに来て1年ちょっとで、グリーンカード、常設道場と驚いていた。なによりも、ここアラバマの生徒がエキサイトしていたのが嬉しかった。

YMCA はビキナークラスを週二回指導する事にして後は常設道場に気合を入れる。

次の課題は宣伝である。そのためにはカラテの大会を開催する必要がある。

ここアラバマの深南部で極真カラテ選手権を開催する事であった。
それにはまず道場で大会に出場できるレベルの生徒を育てなくてはいけなかった。
新道場が出来上がり、気合が入って指導に稽古に励んだが困ったことが起きた。

さて常設道場を開けた。生徒の募集である。

TV、ラジオ等のCMは費用がかかり過ぎるので最初から問題外となる。

生徒の協力で、チラシ、ポスターを作成して配る。

朝の軽い稽古から直ぐに道場に出る。

当初は午前中のクラスはつくらなかったが、朝の自主トレーニングを見て入門のインフォメーションを聞きに来る人や、電話での問い合わせがあった。

この電話の対応が非常に難しく、私の英語、その発音が相手に通じないのである。

汗だくだくになりながら、必死で説明するも殆どの人が途中で切ってしまった。

電話でのやり取りは昔ある出版社から出した本に書いたが、もう一度再現してみる。ちょっと喜劇的であるが、私から言わせてもらおうと悲劇的な話である。

一番困ったことは、毎月の月謝の事である。

スターは確か一か月 fifteen dollars 15ドルである。この数字は通じた。

暫くして twenty にし、twenty-five 月謝をあげる。

そのあとが大きな壁となって立ち塞がった。

Thirty dollars 30ドルである。”TH” ”L” ”R” この発音がとても難しい。

正直に言いうと今でも苦勞している。私が「サーティダラーズ」と言う。

自分では上手く話せたと思っているのだが、ところが電話の向こうで、”What? What?” と問い返してくる。心臓が“ドキ～ドキ”と鳴り出す。

焦りながら私が繰り返す。相手「・・・?!」と「う～ん」私の唸り声である。

パッと頭の中で閃く、そうだ!・・・One、two、three と私が言う。

電話のむこうで”One、two、three、・・・yes” と答える。

「OK, オッケー」思わずもれた私の嬉しい呟きである。

今度は私が”three and zero” と相手に言う。

私はこれで thirty 30ドルと言ったつもりだったのだが、「・・・」相手のしばしの沈黙、通じなかったのである。

受話器からは何の音も聞こえなかったが、自然に相手の姿が想像できた。

受話器を持ちながら不思議そうな顔つきで宙を見つめ、それから溜息をしながら頭を振り、両肩をすくめている相手。

会話の最後は長い、なが～い、沈黙の後「・・・、バイ、BYE!」と無情にも言ってきながら、ガシヤンときられました。

ウソみたいな話に聞こえるかもしれないが、これ本当の話である。

私の悲劇的なこの話をロンが涙を出しながら笑った。

ロンがそれでは”Forty” 40ドルと言って見ろと言うので、ホーティForty と発音すると笑いながら通じる、通じると言って月謝を40ドルにする。

47年になる今でも、よく家人や子供たちに発音を直される。

最近孫にもダメ通じないと言われる。

私の英語はメチャクチャだが新入門者はドンドン来た。なんでも気合いだ!

続く

